各人心宮内の秘宮

北村透谷

青空文庫

各人は自ら己れの生涯を説明せんとて、行為言動を示すものなり、而して今日に至るまで真に自己を説明し得たるもの、果して幾個かある。或は自己を隠慝し、或は自己を吹聴し、又た自らを誇示するものあれば、自らを退譲するものあり、要するに真に自己の生涯を説明するものは尠なきなり。

哲学あり、科学あり、人生を研究せんと企つる事久し、客観的詩人あり、主観的詩人あり、千里の天眼鏡を懸て人生を観測すること既に久し、而して哲学を以て、科学を以て、詩人の霊眼を以て、終に説明し尽すべからざるものは夫れ人生なるかな。

厭世大詩人バイロンが「我は哲学にも科学にも奥玄なるところまで進みしが、遂に益するところあらざりし」と放言し、万古の大戯曲家シエーキスピーアが「世には哲学を以ても科学を以ても覗ひ見るべからざるものあり」と言ひたりしも、又た学問復興の大思想家と人の言ふなるベーコンが「哲学遂に際涯するところあらざるべし」と戯れたるも、畢竟するに甚深甚幽なる人間の生涯をいかんともすべからざるが為めならんかし。

人生はまことに説明し得べからざるものなるか。好し左らば、人生は暗黒なる雲霧の中に埋却すべきものとせんか。何物とは知らず吾人の中に、斯くするを否むものあるに似たり。

人の本性を善なりと認めたる支那の哲学者も、人の本性を悪と認めたる同じ国の哲学者も、世界を楽天地と思ひ定めしライプニッツも、世界を苦娑婆と唱へたるシヨツペンホウエルも、

或は善の一側を観じ、或は悪の一側を察し、或は楽境を睥目し、或は苦界を睨視したるものにして、是等大思想家の知り得たるところまでは確実なれども、なほ知り得べからざる不可覚界のひろさは、幾百万里程なるべきか。真理は実に多側なり。神の面は一なれど、之を見るもの、眼によりていかやうにも見ゆるものなるべけれ。深山に分け入りて蹈み迷ふは不案内の旅客なり、然れども其出で来る時には、必らず深山の一部分を識得して之を人にも語り、自らも悟るなり、真理を尋究する思想家の為すところ、亦た斯の如くなるべけん。

深山に蹈入る旅客なかるべからざるが如くに、真理に蹈迷ふ思想家もなかるべからず。人間は暗黒を好む動物にはあらざるなり、常久不滅の霊は其故郷を思慕して、或時に於て之に到着せん事を必するものにてあればこそ、今日に到るまで或は迷信に陥り、或は光明界に出で、宗教の形、哲学の式、千態万様の変遷を経たるなり。人性に具備せる恋愛の如き、同情の如き、慈憐の如き、別して涙の如きもの、深く其至粋を窮めたるものをして造化の妙微に驚歎せしめざるはなし。蛮野より文化に進みたるは左までの事にあらず、この至妙なる霊能霊神を以て遂には獣性を離れて、高尚なる真善美の理想境に進み入ること、豈望みなしとせんや。

欧洲の理想界に形而上派の興りてより、漸くにして古代の崇高なるプラトニックの理想的精神を復活せしめ、爾来欧洲の宗教界、詩文界に生気の活動し来りたるを見る。律法儀式にのみ拘泥したる羅馬教の胎内よりプロテスタニズム生れ出で、プロテスタニズムよりピユリタニズム生じ、ピユリタニズムによりて、長く人心を苦しめたる君主専制の陋弊を破りたる自由の思

想の威霊あるものを奮興したり。或は一転して旧来の迷夢を攪破したるボルテイアとなり、バイロンとなり、ゴエテとなり、カアライルとなり、自由神学派となり、唯心的傾向となりて、今日に至るまでの思想界の変遷はおもしろきこと限りなし。

然れども凡て是等の変遷を貫ぬける一条の絃の存するあるは、識者の普ねく認むるところなり。之を何とか為す、曰く、皮想的信仰破れて、心を以て基礎とする思想及び信仰の漸く地平線上に立ち上りて、曙光炳灼たるものある事是れなり。凡ての批評眼を抉り去りて後に聖経を解かむとするは、むかし羅馬教の積弊たりしものを受けて今日の浅薄なる聖経の読者が為すところなり、心を以て基礎とし、心を以て明鏡とし、心を以て判断者となし、以て聖経に教ゆるところを行はんとするは、最近の思想を奉じ自由の意志に従ひて信仰を形くるものなりけり。

人世は遂に説明し得べからざるものなり、然らば人生を指導するものも亦た、遂に解釈し尽くす能はざる程の宝蔵にあらざれば、可なるところを知る能はず。数間の地を測るには尺度にて足るべし、天下の大を度るには、人造の尺度果して何の用をかせむ。もし聖経の教ゆるところ、単に消極的の殺快楽（或は克己）に止まらば、聖経も亦た古来幾多の思想界の階段の一となるの歴史上の価値を得るのみにして、止まんのみ。

或は利得の故に教会に結び、或は逆遇に苦しみて教理に帰依す、是の如きは今日の教会にめづらしからぬ実状なり。もし夫れ人間の本性が全く教理を認めたるものならば、或は利得を取り或は帰依をなす元より自由にてあれど、苟くも其発心の一瞬間に卑劣なる慾情の混り居らば、

其教会の汚濁、実に思ふべきなり。然れども基督の本旨は善人を救ふにあらず、不善を善に回へすにあれば、われは始めに染汚の慾情を以て入り来りしものも、後には極めて浄潔なる聖念に満たさるゝ様にならん事を願ふなり。

バプテスマのヨハネは基督の為に道を備へんとて遣はされたり。道を備ふるとは何ぞ。曰く、人々を悔改に導くなり。悔改とは何ぞ。曰く、不善に向ひたる霊性を善に向はしむるなり。不善の行為は適ま不善の実象を現ずるに過ずして、心の上にあらはれたる一黒点に外ならず。不善の行為を廃めて善の行為をなすも亦た、心の上にうつりたる一白点に外ならず。共に心の上にあらはるゝものにして、心ありて後に善もあり不善もあり、心なければ何を悔改むるところとせむ。

心こそ凡てのものを涵する止水なれ。迷ふも茲にあり、悟るも茲にあり、殺するも仁するも茲にあり、愛も非愛も茲にこそ湛ふるなれ。ヨハネの所謂悔改とは、即ち心を直くするにあり、ヨハネの所謂道を備ふるとは、即ち心を虚うするにあり、心を虚うする後にあらざれば、真理は望む事を得べからざればなり。基督教に於て心を重んずる事斯の如し。唯だ夫れ老荘の、心を以て太虚となし、この太虚こそ真理の形象なりと認むる如き、又は陽明派の良知良能、禅僧の心は宇宙の至粋にして心と真理と殆一躰視するが如きは、基督教の心を備へたる後に真理を迎ふるものと同一視すべからず。

以上は「心」に就きて説きたるまでなり、いでわれは是よりわが感得したるところを述て、

心宮内の秘殿を論ぜむ。

聖経はエルサレムの神殿を以て神の座すところとせり、其神殿に聖所あり、至聖所あり、至聖所には祭司の長の外之に入ることを得るもの甚だ稀なりと伝ふ。われ惟へらく、人の心も亦た斯くの如くなるにあらざるか。心に宮あり、宮の奥に更に他の宮あるにあらざるか。心は世の中にあり、而して心は世を包めり、心は人の中に存し、而して心は人を包めり。もし外形の生命を把り来つて観ずれば、地球広しと雖、五尺の躰軀大なりと雖、何すれぞ沙翁をして「天と地との間を蠕ひまはる我は果していかなるものぞ」と大喝せしめむ。唯だ夫れこの心の世界斯の如く広く、斯の如く大に、森羅万象を包みて余すことなく、而してこの広大なる心が来り臨みて人間の中にある時に、渺々たる人間眼を以て説明し得べからざるものを世に存在せしむるなり。

吾人は堕ちて世間にある事を記憶せざるべからず、出世間の出世間の事を行ふより、在世間の出世間の事を行ふの寧ろ大にして、真なる事を記憶せざるべからず。基督の教理も亦た茲に存す、彼は遁世を教へずして世にうち勝つことを教へたり、彼は世の大とするものを斥けて小とし、世の小とするものを挙げて大とせり、彼は学者法律家等を責むるに偽善者の名を以てし、却りて最も小額の義財を神に献ずるものを激賞したり、その斯く教へたるもの、要するに人間の中に存在する心は至大至重のものにして、俗眼大小の以て衡すべきにあらず、学問律法の以て度測すべきものにあらず、小善小仁の以て論ずべきにあらざるを示せしに外ならず。

小善小仁は滔々たる天下之を為すに難きもの多からず、大善大仁はいかなる人にして始めて行ふを得むか。

教会内にて、つまらぬ批評眼をもつて他の小悪小非を穿つものには、教会内の小善小仁すらも旌し易からず、而して今日の教会の多数は斯くの如くなるを悲しむなり。夫れ小善小仁は、古へのパリサイ人能く之を為せり、彼等は教会にて威厳を粧ひ、崇敬をあらはし、小悪小非行を慎しむ事、今の俗信仰にまさり、小善小仁を行ふ事、今の所謂基督教信者なるものに幾等か加ふるところありし、然るも基督は之を排して、蝮の裔とまで罵りぬ。

宗教の本意、豈に狭穿なる行為の抑制にあらんや。われは、教会の義財箱にちやら〳〵と響きさして、振り向きて傲り顔ある偽善家を悪むと共に、行為の抑制を重んじて心の広大なる世界を知らざるものをあはれむ事限りなし。何事ぞ、人間を遇するに鞭を用ひて、其行住坐動を制せんとするが如きは。宗教豈斯の如きものならんや。

心に宮あり、宮の奥に他の秘宮あり、その第一の宮には人の来り観る事を許せども、その秘宮には各人之に鑰して容易に人を近かしめず、その第一の宮に於て人は其処世の道を講じ、其希望、其生命の表白をなせど、第二の秘宮は常に沈冥にして無言、蓋世の大詩人をも之に突入するを得せしめず。

今の世の真理を追求し、徳を修するものを見るに、第一の宮は常に開けて真理の威力を通ずれど、第二の宮は堅く閉ぢて、真理をして其門前に迷はしむるもの多し。第一の宮に入るの門

は広けれども、第二の宮の門は極て狭し。第一の宮に入りたる真理は、未だ以て其人を生かしむるものにあらず、又た死せしむるものにあらず、喝、第一の宮に善根を種き懺悔をなすは、凡人の能はざるところにあらず、この凡人豈に大遠に通ずる生命と希望とを、いかにともするものならんや。福音何物ぞ、救何物ぞ、更生何物ぞ、是等の物を軽侮し、玩弄し、徒らに説き、徒らに談じ、徒らに行ひ、徒らに思ひ、第一の門までは蹈入らしめて第二の門を堅く鎖すもの、比々皆是れなるにあらずや。尤も笑ふべきは、当今の宣教師輩が「福音」の字句に神力ありと信ずる事なり。彼等は漫に言を為して曰く、「福音の説かるゝところ必らず救あり」と、而して彼等は福音を説かずして、其字句を説く、自ら基督を負ふと称して、基督の背後に隠るゝ悪魔を負ふ、咄、福音を談ぜんとするもの、何ぞ天地至大の精気に対して、極めて真面目なる者とならずや。其第一の宮を開きて、第二の宮を開かず、心あるも心なきに同じ。己れ寒村僻地より来り、国家の大に愛すべきを知らずして、叨りに自利自営を教へ、己れ無学無識を以て自ら甘んじながら、人に勧誘するところ「学問」を退ぞけ、聖経のみを奉ぜよと謂ひて、以て我が学問界以外の小人に結ばんとし、己れ文学美術の趣味、哲学の高致を解せざるが故に、愚物を騙罔して文学を遠くべしと謂ふ、斯くして一国の愛国心をも一国の思想をも一国の元気をも一国の高妙なる趣味をも尽く〳〵刈尽して、以て福音を布かんとす、何すれぞ田園の沃質を洗滌し尽して、然る後に菓木を種ゆるに異ならんや。心の奥の秘宮の門を鎖して、軽浮なる第一宮の修道を以て世を救はんとするの弊や、知るべきなり。

道に入るは極めて至難とするところなり。道に入るは他の生命に入るものなるを記憶せざるべからず、道に入るはレゼネレイションの発端なるを記憶せざるべからず。然るに今の世の所謂基督教会なるものを見るに、朝に入りたるもの夕に出で、出没常なく、去就定まりなし、その入るや入るべからざるに入り、其出づるや出づべからざるに出づ、何ぞ自らの心宮を軽んずるの甚しき。

洗礼を施すは悪きことにあらず、然れども其を以て基督の弟子となるに欠くべからざるの大礼となすは非なり、心を以て基督に冥交する時、彼は無上の栄ある基督の弟子なり、洗礼を施さゞる悪しきにあらず、然れども洗礼を施さゞるを以て直ちに基督の弟子となり了したりと思ふは大早計なり、凡て心の基督に通じたるとき、即ち心が基督の水に浴したる時、再言せばパウロの所謂火の洗礼に遭ひたる時こそ、真に基督の弟子となりたるなれ、然り、心の奥の秘宮開かれて、聖霊の猛火其中に突進したる瞬時に於てこそ。

ナタナエル無花果樹下に黙坐す、ナザレのイエス彼を見て、以て猶太人の中に尤も硬直にして欺騙なきものと思へり。後世の之を説くもの、ナタナエルの黙思を論ぜずして、基督の威力のみを談ず。ナタナエルを知るは基督なり、然れどもナタナエルのナタナエルたるは基督の関するところにあらず、彼が心の照々として天地に恥るところなきは、彼自らの力なり、彼を救ふと救はざるとは彼の関り知らざるところなれど、救はるべき者になると否とは、彼の自力なり、斯般の理極めて睹易きものなるを、今の世往々にして聊かの自力をも恃まずして他力を

専らにするものあり、神に祈念するを以て惟一の施為となすや、恰も彼の念仏講の愚輩の為すところを学ばんとするものゝ如し。告ぐ、基督は救ふべきものを救ひ、救ふべからざるものを救はざる事を、千言万句の祈祷は一たび基督を仰ぎ見るの徳に若かず、仰ぎ見るは心を以て仰ぎ見るべし、祈祷の教会をかしましうするは、尤も好ましからぬことなれ、我は凡ての教会の黙了せん時に、大活気の炎上すべきを信ず。

慈恵の事、伝道の事、世間、其精神を誤解するもの多し、われは今くだ〳〵しく述ぶるを欲せず。

最後に

一個人の尤も安く尤も平らか
なるところを尋ねて見む。

人には各自に何事かの秘密あるものなり、とは詩家某の曰ひし言なるが、恨むらくは此言に洩るゝものゝ甚だ尠なるを。言ひ難きにあらず、発表し難きにあらず、唯だ夫れ日常思惟するところのもの極めて高潔なる事あり、極めて卑下なる事あり、自ら責め、自ら怒り、自ら笑ひ、自ら嘲り、静坐する時、瞑目する時、談笑する時、歩行する時、一々その時々の心の状あれば、その中に何事か自ら語るを快しとせざるものなき能はず。然れども俗人は之を蓋はんとし、至人は之を開表して恥づるところを知らず、俗人は心の第一宮に於て之を蓋はん事を計策す、故に巧を弄して自ら隠慝するところあるなり、然れども至人は之を第二の心宮に暴露して人の縦

に見るに任す、之を被ふにあらず、之を示すにあらず、其天真の爛※たるや、何人をも何者をも敵とせず味方とせず、わが秘密をも秘密とする念はあるざるなり、然り、斯かる至人の域に進みて後始めて、その秘密も秘密の質を変じ、その悪業も悪業の質を失ひ、懺悔も懺悔の時を過ぎ、憂苦も憂苦の境を転じ、殺人強盗の大罪も其業を絶ちて、一面の白屋、只だ自然の美あるのみ、真あるのみ。

この美こそ、真こそ、以て未来の生命を形くるものなるべし。基督を奉ずるもの丶当さに専念祈欲すべきもの、蓋しこの美、この真の境なるべし。

倒崖の仆れかゝらんとする時、猛虎の躍り噬まんとする時、巨※の来り呑まんとする時、泰然として神色自若たるを得るは、即ちこの境にあるの人なり。生死の界を出で、悟迷の外に出でたるの無畏懼は、即ちこの境にある人の味ひ得るところなり。

むかしはヨブ凡ての所有を失ひ、凡ての親縁眷属を失ひ、凡ての権威地位を失ひ、加ふるに身は悪瘡の苦痛に堪えがたく、身命旦夕に迫れり。然れども彼は神を恨まず、己れを捨てず、友は来りて嘲れども意に介せず、敵は来りて悩ませども自ら驚かず、心を照らかにして神意を味はへり。彼は是れ、其秘宮の内に於て天地の精気に通じたるもの、平和の極意を得たるもの。尤も富み、尤も栄えたる人の夢にだも感得する事能はざる極甚の平和を、この尤もあはれに尤も悲しむべき破運の王（説者ヨブを某国の王なりと信ぜり）が味ひ得たりし事を看ば、天国の極意の至妙至真たる事を知るに難からじ。

人須らく心の奥の秘宮を重んずべし、之を照らかにすべし、之を直うすべし、之を白からしむべし、之を公けならしむべし。大罪大悪の消ゆるは此奥にあり、大仁大善の発するは此奥にあり、秘事秘密の天に通ずるは此奥にあり、沈黙無言の大雄弁も此奥にあり、然り、永遠の生命の存するもこの奥にあり、かの説明し得べからずと言はれたる人生の一端の、説明せらるゝもこの奥にこそ。この奥にこそ人生の最大至重のものあるなれ。

（明治二十五年九月）

青空文庫情報

底本：「現代日本文學大系　6　北村透谷・山路愛山集」筑摩書房
1969（昭和44）年6月5日初版第1刷発行
1985（昭和60）年11月10日初版第15刷発行
初出：「平和　六號」平和社（日本平和會）
1892（明治25）年9月15日
入力：kamille
校正：門田裕志、小林繁雄
2005年10月6日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

各人心宮内の秘宮

北村透谷

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/